

## 浄土真宗親鸞会

——「ファンダメンタリズム」論の再検討に向けて——

森 葉 月

### 1. はじめに

富山県は、全国でも有数の真宗地帯として知られている。しかし、高度経済成長に伴う都市化の進展と共に、遅まきにはあるが様々な新宗教が入り込み、今やその一角は明らかに切り崩されつつあるのが現状である。そこでは、現世利益の要求に対しては新宗教が応じ、葬送儀礼等に関しては真宗を始めとする仏教寺院が受け持つという暗黙の「住みわけ」が行われ、少なくともこれまではそれが「真宗地帯」の面目を辛うじて支えてきた。

しかし、そうした構造を根本から揺さぶるような新たな動きが、今この地に芽生えつつある。「浄土真宗親鸞会」（以下親鸞会と略す）を名乗る新教団の台頭がそれである。

親鸞会は、富山県小杉町に本部を置く、会員数10万人（公称）余りの新教団である。その会員数のみを見れば、東西両本願寺教団や、他の大型新宗教教団には及ぶべくもない。<sup>1)</sup>しかし、新宗教と本願寺の双方に対する厳しい対決姿勢は、上述の構造自体の矛盾を暴くものとして、とりわけ本願寺末寺の僧侶達の心胆を寒からしめている。

このような事態に着目した筆者は、1993（平成5）年に初めて親鸞会の本部を訪れ、以来今日まで断続的に調査を続けてきた。親鸞会は外部の者に対してガードが固く、未だその全容を掌握するのは難しいが、会の出版物や法話の聴聞等を通して、これまでに教義や組織、布教活動の概略についてはほぼ掴むことができた。それらを総合してみると、親鸞会の台頭は、真宗地帯の信仰構造の変化という問題に止まらず、今日の宗教研究が呈示している様々な問題にも、示唆するところが少なくないと思われる。

親鸞会についての先行研究は皆無に等しいが、わずかに室生忠や小沢浩が一般向けに書いたものがあり、その中でも幾つかの視点が示唆されている。<sup>2)</sup>例えば小沢は、親鸞会がいわゆる「ファンダメンタリズム」の性格を帯びていると言い、そうした性格が今日の日本の新宗教運動には欠落していると指摘している。小沢の指摘は印象に基づくもので、「ファンダメンタリズム」とは何か、という肝心の点に触れられていないため、未だ学問的な批判に堪え得るものとはいえないと思われるが、筆者がこれまでに得た資料から判断する際、この指摘は充分検討に値するものと考えられる。

親鸞会を「ファンダメンタリズム」という視点から捉えることの意義は、差し当たり次の点

が挙げられると思われる。即ち、親鸞会が「ファンダメンタリズム」として検証された場合、これまでアメリカのプロテスタント、イスラム教、ユダヤ教、ヒンドゥー教等の一部に個別的に見られる現象として扱われてきた「ファンダメンタリズム」を巡る議論に新たな材料と視点を与えることとなり、それによって「ファンダメンタリズム」という概念を地域や宗派により限定されるものとしてではなく、世界の宗教現象に通用する普遍的な枠組みとして捉え直していく可能性を示唆している、ということである。そして今一つの意義は、それによって、日本の新宗教を巡る研究状況にも新たな材料と視点を持ち込むこととなり、ひいては、日本宗教の特質を巡る議論にも何らかの影響を与えることが可能になるであろうことである。しかし、そうした議論が成り立つためにも、未だ確かな回答を持たない、「ファンダメンタリズムとは何か」という問に先ず答えていくことから始めなければならない。

少々大風呂敷を広げ過ぎた感があるが、筆者は目下、このような抱負の下にファンダメンタリズムの視点から親鸞会にアプローチしていく作業を試みている。以下の小稿は、そうした作業の前提をなすものとして、取り敢えずこれまでの調査で得た材料から、親鸞会のアウトラインをまとめたものだが、無論、親鸞会そのものは、他のアプローチを拒むものではない。そうした意味から小稿では、上に述べたような筆者の関心を持ち込むことを避け、出来る限り客観的な事実のみを記述するように心掛けた。小稿が様々な人々の様々な関心に応え得るものとなれば幸いである。

## 2. 沿革

第一に、親鸞会の誕生と展開、及びその基本的性格について述べていきたい。これらは、会の創設者である現会長・高森<sup>ほんてつ</sup>顕徹の存在と切り離して論ずることはできない。そこで、ここでは先ず高森の略歴を紹介し、その上で親鸞会のこれまでの足跡と現状について明らかにしておきたい。

但し、高森自身は自らを「一親鸞学徒」に過ぎないとして、自伝を著わすことも、公の場で自らについて語ることもしていない。そのため以下の彼に関する記述は、会の出版物や会員の証言に拠るものである。

### 2-1. 高森顕徹の略歴

親鸞会会長・高森顕徹は、1929（昭和4）年2月6日、富山県氷見市大浦の浄土真宗本願寺派末寺・遠景寺<sup>おんけいじ</sup>に次男として生まれた。氷見市は、「真宗王国」と呼ばれる富山県の中でも特に真宗信仰の盛んな地域で、近世初期から明治初期にかけて「異安心<sup>いあんじん</sup>」と呼ばれる異端的な運動が盛んだったことでも知られている。<sup>3)</sup>

彼の幼少期については、上述の理由から殆ど語られてはいないが、このような宗教的風土は、その後の彼の思想形成に何らかの影響を与えていると考えても良いだろう。

彼は第二次世界大戦から戦後にかけて青年期を過ごした。そのことも、彼の思想形成を考える時には見逃せない。1945（昭和 20）年、彼は海軍の特攻隊に志願した。「この時は、死後は何も無くなる、と考えていたため、恐ろしくはなかった」と後に語っている。<sup>4)</sup>しかし、出撃寸前で終戦を迎えたため、無事に帰還した。

このような彼の戦争体験は、彼が説法を行う際に着用する「<sup>きょうかいふく</sup>教誨服」と呼ばれる軍隊風の黒い上着や、「上隊・中隊」等の下部組織の名称（後述）、そして何よりも「死と向き合うこと」を重視する親鸞会の教えに少なからぬ影響を及ぼしていると思われる。

復員後、彼は高岡仏教学院に入学し、ここを半年で卒業の後、竜谷大学専門部に進んだ。在学中は興正派伊藤康善一派の信仰運動に参加していたという。<sup>5)</sup>この頃から彼は街頭で「死線を越えて」という腕章を着け、活発な布教を始めた。

同じく大学在学中の 1947 年、18 歳の時に、彼は「<sup>しんじんけつじょう</sup>信心決定」（その意義については後述の「教義」の項参照）を体験した。<sup>6)</sup>この体験については、形だけ真似をして誤った信仰に陥る者が現われるのを防ぐためという理由から、内容については語られていない。

また、本願寺の戸籍とも言うべき「<sup>めつけ</sup>目付」によると、同年、彼は本願寺派の寺院で得度し、僧侶となっている。しかし、当時の本願寺教団は「親鸞聖人のほんとうの教えを伝えていない」として、その在り方に強く反発し、1952 年、次に述べる「<sup>めいけい</sup>徹信会」の結成と同時に、彼は事実上教団から離脱した。そして 1970 年、41 歳の時、彼は正式に帰俗し、今日に及んでいる。

## 2-2. 親鸞会の結成と歩み

次に親鸞会の結成から今日に至るまでの歩みについて述べておきたい。

1952 年に、高森は先ず「徹信会」というグループを結成する。スタート時の会員は高森を含めてわずか三名であった。しかし、ガリ版で会報を発行しながら主に滋賀県や富山県などのいわゆる「真宗地帯」を中心に精力的な布教を行い、次第に会員数を増加させていく。そして 1958 年、会名を「浄土真宗親鸞会」と改め、ここに現在の親鸞会の直接の基礎が築かれた。

ところでこの前年 1957 年、親鸞会はその特徴をよく表わす行動の一つを起こしている。それは、真宗大谷派講師柏原祐義が書いた親鸞会非難のパンフレットに対する激しい抗議活動である。高森は「破邪顕正」を釈尊や祖師親鸞に由来する宗教活動の要諦と見なし、邪義と見られる他宗教、他宗派への積極的な批判を展開してきたが、<sup>7)</sup>とりわけ、上述の例のような本願寺との対決は、会の存在理由を証するものとして重視された。次いで、1979 年、真宗本願寺派の学問所である伝導院の紀要に、紅椽英頭による論文「現代における異義の研究—高森親鸞会の主張とその問題—」<sup>8)</sup>が掲載されるや、その内容に対する質問状を連発して回答を迫り、遂には本願寺境内での座り込みという激しい抗議行動に至る。この本願寺に対する抗議行動は、84 年まで、前後 3 回に及んだ。<sup>9)</sup>そして、1996 年本願寺派広報部長中山知見が全国の末寺に配布

した「高森親鸞会系ビデオの販売活動に関する対応への留意事項について」という書簡に端を発する論争が今もなお執拗に繰り返されている。

このように親鸞会の歩みの多くは、本願寺を始めとする「邪義」「邪宗」への「対決」によって彩られているが、その過激な行動に眉をひそめる者が少なくない反面、それによって親鸞会に関心を寄せる者が増え、これまでの会の発展を支えてきたことも否めない事実のようである。

こうした会の発展を背景に、親鸞会は1988（昭和63）年、それまで富山県高岡市に置かれていた本部を高岡・富山両市のベッドタウンである射水郡小杉町に移転した。毎月営まれている高森会長の法話の際には、全国から集まってくる会員によって5000人を収容する大小二つのホールが埋め尽くされている。会員数の公称10万人は、宗教団体としては中堅どころのそれだが、最近では日本のみならず、台湾、韓国、ハワイ、ブラジルなど、海外にも教線を伸ばして、その勢いは未だ上昇の途次にあると思われる。

### 3. 教義

次に親鸞会の教義について見てみよう。

親鸞会の教えは、基本的には本願寺教団<sup>10)</sup>において説かれているものと大きく異なるものではない。ごく簡単に要約すれば、「煩惱の塊である自己が、その罪の深さに気付かされて、絶対他力の信心、阿弥陀仏への絶対帰依の境地へと導かれ、それによって極楽往生を約束される」という教えである。しかし、解釈や強調点、用いる語において本願寺教団の説く教えと多少異なる点も幾つか見られる。ここでは、そうした点についても触れていきたい。

#### 3-1. 教義の概略

親鸞会の教義は多岐に渡っているが、ここでは高森が法話や出版物等において折に触れて用い、特に重要なものとして強調していると思われるキーワードに即してその内容を再構成していくことにする。その際、本願寺教団や最近の新宗教の説くところとも出来る限り比較対照しながら、親鸞会の特徴を明らかにしていきたい。

〈後生の一大事〉

「死」、親鸞会の教えに出会う際、人は先ず最初にこの言葉を突きつけられる。例えば、会員向けの雑誌『とどろき』には、しばしば次のような言葉が散見される。「何人も、死からは逃れられない、しかも、どんな形で死ぬかわからない。」<sup>11)</sup>「平均寿命が八十歳と言っても、必ずそこまで生きられる保証は全くない。それどころか死は、今日、明日にも突然、我身を襲うのだ。」<sup>12)</sup> また、「されば朝に紅顔ありて、夕べには白骨となれる身なり」という有名な一節を含む蓮如の『御文章』五帖十六の「白骨の章」等も折に触れ用いられている。

それでは、人は死んだらどうなるのか。親鸞会では、すべての人は死ねば必ず「無間地獄」へ墮ちると説かれる。この「無間地獄」とは、釈尊の説法の中にある言葉で、<sup>13)</sup>「経典に釈尊は「一切衆生、必墮無間」とこれを説かれています。』<sup>14)</sup>という。従って親鸞会にとって、「後生の一大事」とは「死後に無間地獄に墮ちること」なのである。高森は言う。「(後生の一大事とは)すべての人間はやがて死んでゆきますが、一息切れると同時に無間地獄に墮ちて、八万劫中苦しみ続けねばならぬ大事件をいうのです(括弧内筆者)。』<sup>15)</sup>

では何故、全ての人間は地獄に墮ちねばならないのか。それは全ての人間が、「親鸞聖人が「極重悪人」「一生造悪」「地獄一定住みか」と懺悔される程、悪の固まり」の、「悪しか造れない」<sup>16)</sup>存在であるからである。たとえ、善と思われるような行為をしても、その善には「見返りを期待する心」が潜んでいるため、それは真実の善ではなく、「雑毒の善」<sup>17)</sup>となるのである。

要約すると、どんな人間も真に善行を行うことはできず、悪のみをその生涯において造り続ける。そしてその悪行のために死後地獄へ墮ち、苦しむことになる。また、死後地獄へ墮ちるといことが、意識されるとされないとにかかわらず、生きている現在の生活にも苦しみを与えているというのが親鸞会の「後生」説のあらましである。

#### 〈無間地獄〉

ところで、ここで説かれている地獄のイメージとはどのようなものなのであろうか。

それは、親鸞会では、「地獄の苦しみは、それを説き切る者、聞き切る者があつたとすれば両者とも血を吐いて死ぬ程の、説くことさえ苦しみに満ちた非常に恐ろしいものであるが、敢えて譬えを用いて説くならば、一日三百本の槍で突かれる苦しみを小石とすれば、地獄の苦しみはヒマラヤ山である」という釈尊の説法の中の言葉によって示される。<sup>18)</sup>非常に凄惨で、想像を絶する苦しみに満ちた世界のイメージである。

しかも、上述のように、人間はこの地獄の苦しみを死後にのみ味わうのではない。現世においても我々は常に大きな苦しみの中に生きている。なるほど人々は生きているうちに様々な楽しみを味わう。しかしそれらはいずれも一時的なものであり、状況が変われば崩れ去ってしまうはかないもの、「無常」のものである。これを親鸞会では「相對の幸福」という。例えば高森は次のように言っている。「どんなに素晴らしい人と結婚しても、相手が何時病に倒れるやら死ぬやら判りません。また変心して不仲になり破鏡の憂き目にあい、骨肉相喰む争いをせねばならないかも判りません。』<sup>19)</sup>そして、常に欲するものが得られないという不満、死を前にしているという不安、「後生の一大事」への恐怖にさらされているのが、意識すると否とにかかわらず、我々の生活の現実に他ならない。まさに「この世の地獄」である。かくして、人間は生きている間も死後も苦しみ続ける運命にあるのである。

このように「死」と「死後の苦しみ」を容赦なく突きつけてくる親鸞会の教えは、これまで

の大方の新宗教が説いてきたそれとはかなり趣を異にしているように思われる。大方の新宗教では、死後、本来の自己である霊体はより高い次元へ行く、<sup>20)</sup>「死」は「終り」ではなく、「新たな生への旅立ち」である<sup>21)</sup>等として死の問題を比較的肯定的に、あるいはソフトに扱うものが多い。しかし親鸞会にはそのような柔らかさ、曖昧さはない。「死ねば必ず地獄堕ち」、それだけである。

一方、親鸞会の死に関する教説は、本願寺教団の法話や出版物の中に見られるそれとも対照的である。本願寺教団では、「現在生かされて生きることを感謝することから救いは始まる」<sup>22)</sup>というように、そのスタート地点では先ず「現在」に目を向ける。それに対して親鸞会では、先ず死の現実を直視することから全てが始まる。言い換えると、親鸞会では死後の問題を解決することによって現世における救いを求め、本願寺は現世における心構えに先ず気を配って、それを変えることにより来世の救いを目指そうとする。

筆者は、両者の死に関する教説に見られるこのような差異を論評する立場にはない。しかし、少なくとも親鸞会の会員にとってその教説が新鮮な響きを持つものとして迎えられていることは、注目に値するものと思われる。

#### 〈信心決定〉=〈絶対的幸福〉

それでは、このような現世と後生の苦しみから解放され、救われるために、人々はどうすればよいのであろうか。こうした問に対する親鸞会の答えは極めて簡潔である。「信心決定」<sup>しんじんけつじよう</sup>しさえすれば救われる、というのである。「信心決定」とは、一言で言えば、「確かな信心を獲得すること」だが、その「確かな信心」とは、「阿弥陀仏の絶対の救いにあずかる」こと、「阿弥陀仏の絶対の願力によって助かったこと」<sup>23)</sup>で、具体的には、現世において死後阿弥陀仏の浄土へ行ける身分(=等正覚)になることが確定することである。「信心決定」して死後の不安が除かれれば現世の様々な出来事は楽しむべきことに変わる。

「信心決定」を体験して救われると、この救いは何が起ころうとも崩れたり消えたりしないので、親鸞会ではこれを、先に述べた「相対的幸福」と対応して、「絶対的幸福」と呼んでいる。そして、この「絶対的幸福」を得ることが、人間として生まれてきた以上は果たさなければならぬ「人生の目的」となるのである。あるいは「絶対的幸福」を得るために人は生まれてくるのであると言い換えても良い。

この「人生の目的」とは何か、という問に心魅かれて入会したと話す学生会員も少なくない。現在の社会で人々が見失いがちな「人生の目的」、生きている理由を提示するという点も親鸞会の特徴の一つとして挙げることができよう。

#### 〈宿善〉

それにしても、この「信心決定」を与えられるために人々は何を為せばよいのか。そのため



には、「宿善」を厚くすることである、と親鸞会では説かれる。

「宿善」とは、親鸞会においては、「聴聞」、「破邪顕正」、「財施」、「教学」に励むこと、廃悪修善(悪行を慎み、善行に努めること)、を指す。

先ず「聴聞」とは、高森顕徹や専任講師による法話を聴くことである。高森の話聴くことは特に重視されるが、この点については後述の活動の項で述べる。次に「破邪顕正」とは、これも後述するが、布教のことである。この活動を中心に担っているのは青年部、学生部の会員である。特に、この活動において多くの新入会員を獲得した者は、会よりその功績を称えられて表彰されることもあり、そうした会員は自ずから他の会員の尊敬を集めることになる。また、「財施」とは、会に会費や寄付金を納めること、奉仕活動、優しい言葉や態度で人に接すること、などを指す。更に「教学」に励むことは、「聴聞」の際に「印象深く聞ける」、「破邪顕正の際に自信を持って破邪でき、筋道を立てて話ができる」、「求道においても逆境を乗り越えることができる」という理由から行うべきものとされる。会では成果を上げる目的で、理解度を確認するための教学試験が実施されており、そのためのテキストも販売されている。テキストの内容は、経典の解釈、仏教や浄土真宗の歴史、親鸞や蓮如等の著作、また、高森の著書や法話の内容等に関わるものである。

#### 〈二種深信〉

しかし、親鸞会の説くところによれば、これらの「宿善」は「信心決定」の直接的な因とはならない。「宿善」を厚くしようと自力で努力するうちに、どんなに努力しても努力しきれない怠惰な自分、どんな努力も及ばない程罪深い自分に気付かされる時が来る。その時、罪悪深重・地獄一定、つまり自力では助からない程罪深い自己を思い知らされ(これを浄土真宗では「機の深信」という)、その際罪悪深重の身であるからこそ阿弥陀仏の救済が与えられるということに対して疑いの心を全く持たなくなる(これを浄土真宗では「法の深信」という)。この二つの深信を併せて浄土真宗では「二種深信」と呼んでいるが、「宿善」をそのための方便とするところに親鸞会の特色が見られる。

いずれにしても、このように「宿善を積む」という行為は自力によるもののように見える。しかしそのような行為も、実は「信心決定」した後に振り返ってみると、阿弥陀仏によってなさせられていたのだということに気付くので、自力ではなく、やはり「他力の信」なのであるという。

また、「機の深信」、「法の深信」の体験は、同時に、「一念」(=「アツという間もない時尅の極促」、非常に短い時間)で得られ、「火にさわったようにハッキリ」と知覚されると説く。

### 3-2. 本願寺教団の教義との比較

親鸞会の教義のあらましは、以上に見てきた通りだが、ともに浄土真宗を唱えながら、親鸞

会の救済論と本願寺教団のそれとの間には幾つかの重要な相違点が見られる。この相違点が、先にも述べた論争の原因ともなっているため、またこの相違こそが親鸞会の特徴を顕著に際立たせるものの一つと思われるため、次にその内容を明らかにしておきたい。

親鸞会と本願寺教団が主として対立しているのは、(1) 罪惡深重・地獄一定は強調されるべきか、(2) 「宿善」の示す内容は何か、(3) 救いは現在にあるのか、死後にあるのか、(4) 「救われたらハッキリする」のか否か、(5) 本尊は名号であるべきか木像や絵像であるべきか、等の点である。

先ず、(1) 罪惡深重・地獄一定について、本願寺教団は、これを否定はしないが、それを「決め手」として責めたてるような行為は「機責め」という異安心の一種とし、退けてきた。従って、これは一見量的な違いのようであり、実は救済論の根幹に関わるものと見なしてよい。

次に(2) 「宿善」に関しては、本願寺教団は、「聴聞」は勧めるが、それが即ち「宿善」だから勧めるのではない、とする。また、「破邪顕正」は信後の報恩行であり、自らの<sup>きやくしん</sup>獲信(=「信心決定」のこ)のための「宿善」ではない、献金(財施)も「宿善」とは言えない、と主張している。これも救済論に直結するだけに、その対立は深刻なものと言える。

(3) 救われるのは現在においてか死後においてか、という点に関しては、親鸞会が必ず現世で救われる、と主張するのに対して、本願寺教団は、「この世で」、「今、ここで救われます」<sup>24)</sup>とは言うものの、「死んでから救われる人もあるし生きているうちに救われる人もある」といったような教えも布教の現場ではなされているようである。むしろそのようなこと自体が余り問題にならないと言ったほうが良いかもしれない。

(4) 救われたらそれと「ハッキリ」自覚できるのかどうか、という点については、親鸞会は、はっきりとわかる、と言う。その際「名医に治して貰ったのに未だ自分の病気が治ったかどうか分からない者があるだろうか」といったような譬が用いられる。これに対して本願寺教団の方は、はっきりとわかる人もあるが、「小さな穴の開いた米俵から少しずつ中の米がこぼれ落ちるように」、「洗濯物が太陽にあたって乾いていくように」徐々に、いつとは気付かぬ間に「信心決定」をする人もいる、とする。これも単なるニュアンスの違いに止まるものではない。

(5) 本尊については、親鸞会は名号でなければならないとしているが、本願寺教団は絵像も木像も「南無阿弥陀仏」を形像で表わしたものだからこれらでもいいし名号でも構わない、いづれにも固執しないとしている。偶像崇拜、という言い方をすれば親鸞会の方がより否定的だと言えよう。

このような対立の様態から窺えることは、第一に、教学の主要部分に関してはそれ程異なるわけではないが、親鸞会ではその教えがそのまま会員に説かれているのに対して、本願寺教団においては、(3)、(4) に関して述べたように、教学と寺院等の法話で説かれている教えが必ず



しも一致していないということ、<sup>25)</sup>そして第二に、本願寺教団の教えに比べて、親鸞会のそれは極めて単純明快で、理解されやすい仕方であつていふことである。具体的に言うると、親鸞会における教えの説かれ方は、従来の浄土真宗の僧侶によく見られる「こうも言えるが、ああも言える」といった融通無碍の仕方ではなくて、「これ一つ」「正しいことは一つだけ」などの表現に見られるように、常に断言的なのである。<sup>26)</sup>この特徴は、「あれもこれも正しい」「真理は偏在する」といった、万教帰一的な教えを特徴とする多くの新宗教とも大きく異なる点であると言えよう。また、こうした性格の中にも、筆者は「はじめに」で触れたファンダメンタリスティックな要素を垣間見るわけだが、ここでは、以上の指摘に止めておく。

## 4. 組織と活動

### 4-1. 組織

次に組織について述べてみたい。

親鸞会の組織は、概ね枠は形成されているが、常に細かい部分が少しずつ変化しており、未だ発展段階にあって、満足のいく形態を模索中のようなのである。

また、これは「はじめに」でも述べたことだが、親鸞会は外部の人間に対して警戒心が強いので、その組織像はなかなか明らかにされない。従つて以下の記述は現在までの会の定期刊行物や、フィールドワーク中に得た情報に拠る。

資料1に示した通り本部組織は、高森会長がトップに存在し、その下に総本部長、総務局長が位置している。総本部長は、地域別組織である各地の本部と年齢・性別組織である学生本部、青年本部、一般本部、婦人部を掌握している。総務局長は、各業務に即した部署を統括している。更にそれぞれの本部あるいは部署には本部長、副本部長、部長、副部長がおり、部員を統括している。総務局の中には特専部と名付けられた職業別組織が存在し、それぞれの職業に応じた業務を行っている。例えば医学科には医師が所属しているが、彼等は他の会員の医療に関する相談に応じることや、自分の患者に会の教えを説くことを実践しているという。また、会経営の病院「真生会」に勤務する者もある。

講師部に所属するのは、教学試験で一定の点数を獲得し、その後「随行者」として高森と行動を共にする経験を一定期間経た「専任講師」である。監正部は法話など会の行事が円滑に行われるためにそれを妨げるものがないかチェックするという業務を担当している。この部員は青年部の中から選抜される。翻訳部は近年海外布教の拡大を目指して設置されたもので、経典や、出版物等の翻訳を行う。弘宣部は、教えを弘めることを目的に業務を行つており、殆どの刊行物はここで制作されている。教学部は、定期的な教学試験の実施、法話等の記録、教学に関する書物の作成と管理を行っている。

以上が教団組織のあらましであるが、次に信者組織に関して見ていきたい。親鸞会の会員は、各々の住む地域が含まれている地域別組織（関東本部、富山本部等）と、その年齢、性別、

身分に応じた年齢別組織（学生本部、青年本部等）の両方に同時に属している。また、年齢別組織は「上隊-中隊-班-分隊」という形で構成されている。そこで、例えば東京に住む学生会員の場合を挙げてみると、関東本部学生東京上隊所属ということになる。

この信者組織に関しては、縦型の組織であるということがその特徴の一つとして挙げられよう。勿論横の繋がりも存在し、各本部内における協力体制、交流もあるようだが、基本的には「上」の者が「下」の者を「導く」という意識が強く、上下関係が明瞭であるように思われる。ここで上下を決定する要因として、会に在籍している期間が挙げられるが、それよりも重視されるのは法話、中でも特に会長高森のそれをいかに多く聴いているか、そして教えに精通しているかである。<sup>27)</sup> このことから「ほんとうの教え」を伝えていくことにこだわる親鸞会のもう一つの特徴が指摘されよう。加えて、先にも述べたように、新しい会員をより多く獲得したものは尊敬され、他の会員を導く立場に任命される。

また、現在の形態に変化する以前は、「参謀室」「指令室」「総指令」等の呼称も用いられていた。また「上隊長」「中隊長」「小隊長」といった名称は今だに用いられている。これらの言葉にも高森の戦争体験が反映されているように思われる。

#### 4-2. 活動

最後に親鸞会の活動について見ておこう。

会の活動の中心となるものの一つとして、先ず法話が挙げられる。具体的には、高森顕徹による大会場での法話や、専任講師による公民館等での法話の開催である。高森の法話の内容は、『正信偈<sup>しょうしんげ</sup>』や経典、仏教説話<sup>28)</sup>の解説などが主である。その際高森は、彼独特の教え諭すような静かな口調で、丁寧に一語一語用語を解釈し、その意味を説く。また、「随行者」と呼ばれる講師との対話方式で進められることも特徴の一つである。会員は高森から「随行者」に投げかけられる問を共に考え、そして彼に与えられる回答を聴いて納得するのである。<sup>29)</sup>

専任講師による法話は、殆どかつて高森が話したものと内容も方法も同じで、彼が用いた独特の譬えもほぼそのまま用いられている。話し方、アクセントなども意識的にか無意識的にかは判らないないが、高森のそれと非常に似ている。高森を「平成の善知識」として仰ぎ、彼の解釈を唯一絶対のものとしてそれを繰り返すといった態度には、善かれ悪しかれ、高森に寄せる会員の信頼の大きさが窺われる。これも親鸞会の特徴の一つとして指摘できるであろう。教えの絶対化はどの宗教にも見られることだが、一つの教えを絶対化して他の解釈を許さない、という姿勢が親鸞会の場合は他宗に比べてより強いように思われる。

この法話を会員は一時間に一回の休憩を除いて延べ約4時間、正座して真剣に聴いている。先に述べた「宿善」になるからである。中には高森の言葉を一言一句書き留めようとペンを走らせている学生の姿も見られる。高森の法話は、毎週日曜日、全国様々な箇所で行われているが、これにはかなり遠方からも会員が訪れている。

この法話の際には、殆ど必ず典拠が示され、その都度会員の持っている本<sup>30)</sup>においてはどのページにそれが掲載されているかが確認される。ここからは、教学を徹底しようとする姿勢が窺われ、それも、教祖等との情緒的な繋がりを重視する多くの新宗教とは異なる特徴の一つと言えよう。<sup>31)</sup>

次に、上でも触れた「破邪顕正」= 布教が重要な活動の一つとして挙げられる。これは実際には彼等にとっての「邪教」、つまり浄土真宗以外の宗教に「迷って」いる人々や間違った浄土真宗理解をしている人、未だ親鸞会の教えを聴いたことのない人々に教えを説くことを意味する。実際に彼等は数人で、または一人で、他宗教の教会寺院あるいは支部等や本願寺末寺を訪問し、宗教論争を持ちかけ、相手の宗派の教義の持つ矛盾を指摘して、自らの教えの正しさを説こうとする。このような戦闘性が、会の活力を生み出していることは疑いないが、その排他的独善性がやがて自らにとっての桎梏となる恐れもないとは言えない。

会成立当初は高森の著作を販売したり、専任講師の公民館等における法話の開催が布教活動の中心であったが、現在は『世界の光 親鸞聖人』と題された会制作のビデオの販売に特に力を注いでいる。

社会との関わりに関する親鸞会の特徴については、機会を改めて論ずるつもりだが、端的に言うならば、彼等は直接的には社会と係わっていかうという姿勢は取らない。天皇制に対する批判や、現状の消費社会に対する批判は、時折法話や出版物の中に見られるが、それらはあくまで対岸の世俗に関わるものと見なされ、それに対して直接的に行動を起こすということはない。むしろ信心を獲得し、自らの心を変えることによって問題を含み持つ現状の中で自らが幸福の身となって生きていくことに彼等の主要な関心はあると見られる。

## 5. おわりに

以上、浄土真宗親鸞会とはどのような団体なのかについて粗いデッサンを試みてきたが、最後に今一度、「はじめに」で述べた筆者自身の抱負に立ち返り、今後の見通し、求められている課題について簡単に触れておきたい。

まず、親鸞会について「ファンダメンタリズム」という観点からのアプローチが可能となるためには、そもそも「ファンダメンタリズム」とは何か、という概念規定の問題を避けて通るわけにはいかないであろう。この問題については、「ファンダメンタリズム」という枠組み自体の有効性に疑問を呈するものまで含めて夥しい議論の集積があり、その代表的なものに目を通すだけでも容易なことではないが、取り敢えずこれまでアメリカのプロテスタント、イスラム教、ユダヤ教等から派生したファンダメンタリズムと言われている運動に関する文献に目を通す中で筆者なりに現在導き出した定義は、以下のようなものである。

「ファンダメンタリズム」とは、「近代」と遭遇する過程で、そこに何らかの精神的危機を見出した人々が、「近代」と妥協しようとする既成宗教(エスタブリッシュメント)の在り方に反

発し、それぞれに固有の宗教の教典や教祖という「原点」に立ち返ることによってその彼等にとっての「聖なる秩序」を回復し、危機的な現状からの脱出を図ろうとする運動である。

未だ表現としてこなれたものではないし、様々な異論も有り得ると思うが、筆者としては、差し当たりこれで多様な在り方を示す「ファンダメンタリズム」運動をほぼ包括することができるのではないかと考えている。そして、もしこのような定義が一応承認されるならば、現世利益の追求を煽る新宗教の横行に近代の果てに現われた社会の根源的な危機を見、それと共生関係を保とうとするエスタブリッシュメント＝本願寺教団との対決姿勢をとり、「祖師」親鸞の「原点＝原典」に立ち返ることで危機からの脱出を目指そうとしている親鸞会は、まさに諸外国のファンダメンタリズム運動と軌を一にするものと言えよう。

しかし、それが学問的な検証に堪え得るものとなるためには、一方で上述のファンダメンタリズムの定義を更に精緻なものにしていくと共に、他方で親鸞会の教義や組織・布教活動等に関する検討を更に深め、目指すところの「聖なる秩序」の内実がどのようなものであるかをより明確にしていく必要がある。と同時に、エスタブリッシュメントである本願寺教団の「近代」を批判的に検証する作業も忘れてはならない。

また、親鸞会のファンダメンタリズムは、「真宗ファンダメンタリズム」とは言えても、それだけでは日本のファンダメンタリズムを云々することはできない。ファンダメンタリズムの成立要件の一つは、立ち返るべき確たる宗教上の原点を持つことだが、その意味で可能性を持つものとしては、日本では浄土真宗の他に、日蓮宗の系列が考えられよう。今の所、「日蓮正宗顕正会」を名乗る中堅の教団がそのようなものとして注目されるが、これも今後の検討課題の一つに加えて置かなければならない。

以上、筆者の無謀ともいえるような見果てぬ夢について敢えて披露してきたのは、それを通して親鸞会の特異な性格が、少しでも浮き彫りにできれば、と考えたからに他ならない。しかし、このようにそれを吐露してしまった以上、厳しい御批判こそ筆者の願うところである。

## 注

- 1) 因みに、『宗教年鑑』平成6年度版（文化庁、平成7年、ぎょうせい）によれば、本願寺派の門徒数は約694万人、大谷派の門徒数は約553万人で、本願寺教団は、東西併せて約1247万人の信者を擁する。
- 2) 室生忠『若者はなぜ新・新宗教に走るのか』時の経済社、1984年、小沢浩「宗教意識の現在」（『岩波講座日本通史』第21巻、1995年）、同『新宗教の風土』岩波新書、1997年
- 3) 18世紀後半に起こった本願寺派最大の異安心事件（三業惑乱）に際しては、氷見町西光寺を中心とする尺伸堂一流が後に異安心の烙印を押された「新義派」の拠点となり、幕末の天保から嘉永にかけて大谷派を揺るがした能登出身の僧頼成の異安心事件でも、氷見町に共鳴する者が多く、慶応年間にはその支持者によると見られる「惑乱」事件が起きている。『富山県史 通史編 IV 近世下』（富山県、1983）、pp. 806-810、小沢浩、前掲書（1997）、pp. 102-104 参照。
- 4) 親鸞会弘宣部員山崎豊氏の証言による。
- 5) 伊藤の信仰運動の詳細については明らかではないが、伊藤は信心決定（教義の項で後述）を特に重視する異端的な教義を主張したという。

- 6) 親鸞会弘宣部員山崎豊氏の証言による。
- 7) 1962年に起こった創価学会との論争など。
- 8) 『伝導院紀要』24号所収、1979年
- 9) 具体的には、1980年、1982年、1984年の3回、会員1000名が本願寺境内内で横断幕を掲げて約40分間シュプレヒコールを繰り返したり、御影堂で500人が8～13時間座り込みをしたりするという抗議行動を展開した。
- 10) 本願寺派と大谷派との間に教義に関する大きな相違はないものと思われるため、ここでは本願寺教団として一括して扱うこととした。
- 11) 浄土真宗親鸞会『とどろき』177号、チューリップ企画、平成7年10月、pp.34-45
- 12) 浄土真宗親鸞会『とどろき』144号、とどろき出版社、平成5年1月、pp.4-17
- 13) この「無間地獄」という語は、織田得能『織田佛教大辞典』（大蔵出版、昭和29年）によれば、世親『俱舍論』卷十一、『成実論』に見られる語で、そこに堕ちた者が「ひま間無く」苦しみを受けるため「無間地獄」と名付けられた、との解説がある。
- 14) 高森顕徹『こんなことが知りたい①』浄土真宗親鸞会、昭和44年、p.6。この文献や、他の出版物でもこのような記述が散見されるが、前掲『織田佛教大辞典』によれば、「必墮無間」の語は〔雑語〕とされており、出典は明らかではない。
- 15) 高森、前掲書（昭和44）、pp.6-9
- 16) 浄土真宗親鸞会『とどろき』173号、とどろき出版社、平成7年6月、p.8
- 17) 浄土真宗親鸞会『とどろき』162号、とどろき出版社、平成6年7月、pp.22-31
- 18) 高森顕徹『こんなことが知りたい①』。p.6-12。実際にどの経典にこのような言葉が見られるのかについては現在のところ明らかではない。
- 19) 高森顕徹『こんなことが知りたい②』浄土真宗親鸞会、昭和53年、p.8
- 20) 例えばGLA、幸福の科学等に典型的に見られる。
- 21) 例えば「出直」を説く天理教などに見られる。
- 22) 具体的な出典はないが、本願寺教団発行のビラや、末寺に掲げられているポスター、法話の中等で頻繁に見聞きする言葉に拠る。
- 23) 高森顕徹『こんなことが知りたい①』浄土真宗親鸞会、昭和44年、p.32
- 24) 本願寺派が、本願寺を批判する内容の親鸞会のビラに対抗して配布したビラによる。
- 25) 大村英昭が『死ねない時代』（有斐閣、1990年）において指摘しているが、現在本願寺教団では、「教学」と「現場」が乖離している状況が少なからず存在すると思われる。親鸞会が本願寺教団に対して反発する理由の一つは、本願寺教団のこのような、言うなればダブルスタンダードに対する不満と考えられる。
- 26) 例えば「これ一つ説くために釈尊はお生まれになったのです。」「これ一つ説くために親鸞聖人は苦勞なされたのです。」などというような表現が法話、著作の随所において見られる。
- 27) 会では、それを鼓舞するために「教学試験」を実施している。希望者はこの試験を受けることができ、その理解度に応じて「導師」「講師」等の学階が与えられる。また、この試験のための「教学テキスト」がある。
- 28) 経典は「仏説阿弥陀経」「仏説観無量寿経」など。説話は「王舎城の悲劇」など。
- 29) 現在も能登地方等に見られる「御示談」等との類似性が見られ、興味深い。教えの説かれ方がそれを聞く者にどのような影響を及ぼし、効果を生むのか、あるいは生まないのかについても、非常に興味深いテーマである。今後、親鸞会のスタイルを通して考えてみたいと思う。
- 30) 法話において用いられる著作や経典（『御文章』、『仏説阿弥陀経』など）は、会の出版部で発行されている。購入は義務ではないが、殆どの会員が購入しているようである。
- 31) 勿論親鸞会においても、教義より高森の人間性に魅かれたからという入信動機を持つ会員も少なからず見出されるが、他の新宗教に比べた場合、教義を重要視している会員がより多いと思われる。

## 参考文献

### I. 教団関係資料

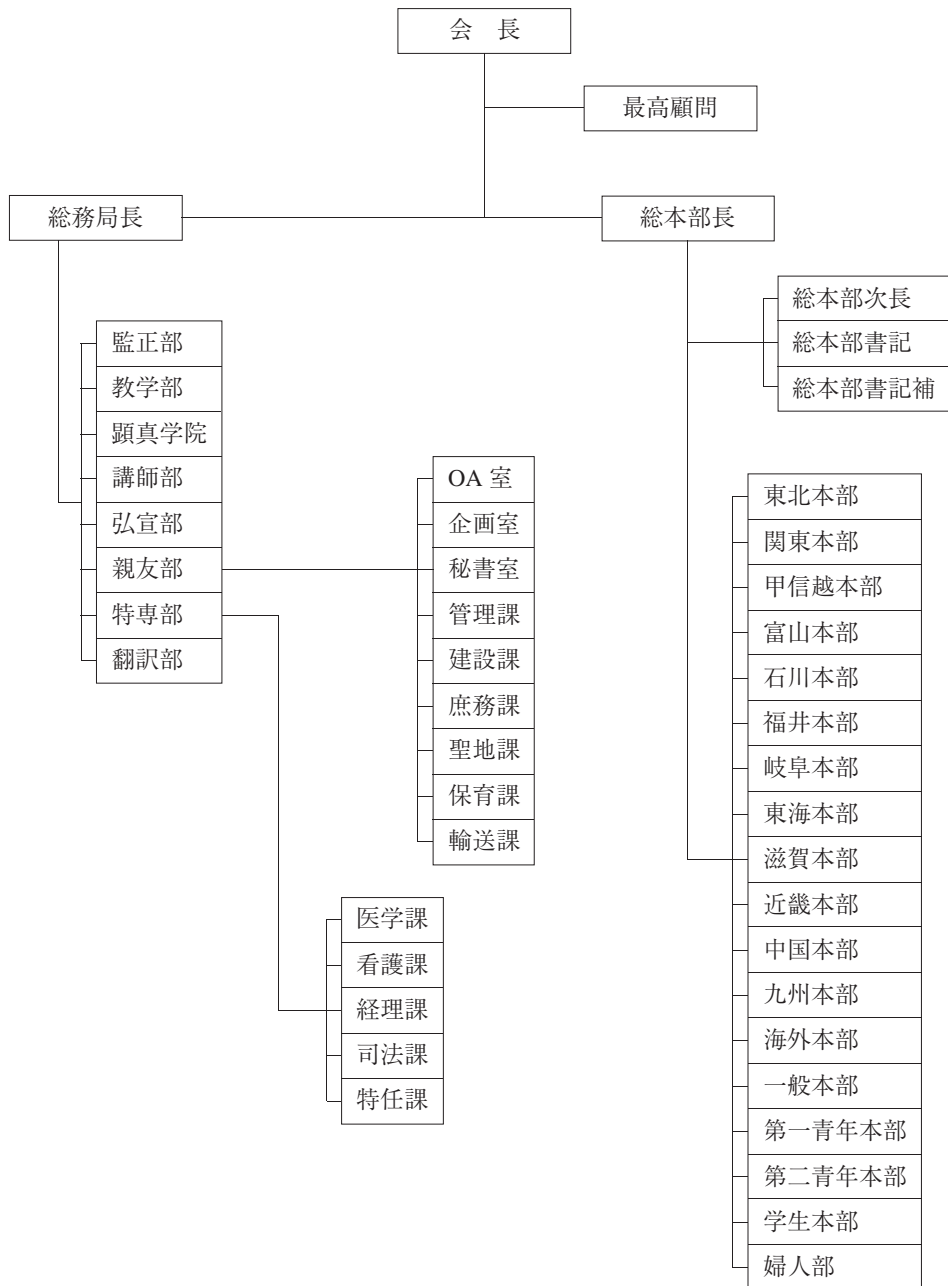
- 浄土真宗親鸞会 『顕正新聞 縮刷版 2』 浄土真宗親鸞会出版部、昭和 54 年  
浄土真宗親鸞会 『顕正新聞 縮刷版 3』 浄土真宗親鸞会出版部、平成 5 年  
浄土真宗親鸞会 『顕正新聞』 浄土真宗親鸞会、平成 5 年 5 月～平成 9 年 9 月  
浄土真宗親鸞会 『とどろき』（第 120-122 号, 145-200 号）とどろき出版社（第 176 号 [平成 7 年 9 月まで]）、チュウリップ企画（第 177 号 [平成 7 年 10 月]～第 200 号 [平成 9 年 9 月]）  
高森顕徹 『こんなことが知りたい ①』 浄土真宗親鸞会出版部、昭和 44 年  
高森顕徹 『こんなことが知りたい ②』 浄土真宗親鸞会出版部、昭和 50 年  
高森顕徹 『こんなことが知りたい ③』 浄土真宗親鸞会出版部、昭和 55 年  
高森顕徹 『こんなことが知りたい ④』 浄土真宗親鸞会出版部、昭和 57 年

### II. その他

- 井上順孝他編 『新宗教事典』 弘文堂、平成 2 年  
大村英昭 『死ねない時代』 有斐閣、1990 年  
織田得能 『織田佛教大事典』 大蔵出版、昭和 29 年  
紅襟英顕 「現代における異義の研究-高森親鸞会の主張と問題点」（『伝導院紀要』 第 24 号） 浄土真宗本願寺派出版部、昭和 54 年  
小沢浩 「宗教意識の現在」（『岩波講座日本通史』 第 21 巻、岩波書店、1995 年）  
同 『新宗教の風土』 岩波新書、1997 年  
富山県 『富山県史 通史編 IV 近世下』 1983 年  
文化庁 『宗教年鑑 平成 6 年版』 ぎょうせい、平成 7 年  
室生忠 『若者はなぜ新・新宗教に走るのか』 時の経済社、1984 年



資料1 本部組織



\* 教団出版物や様々な断片的資料に基づいて筆者が作成（1996年7月）。

資料2 地域別組織

総本部	
東北本部	北海道支部 青森支部・秋田支部・岩手支部 宮城支部・山形支部・福島支部
関東本部	東京支部・神奈川支部・千葉支部 群馬支部・埼玉支部
甲信越本部	新潟支部・長野支部・山梨支部
富山本部	南砺支部・高岡南支部・高岡北支部 富山東支部・富山西支部・小矢部支部
石川本部	金沢南支部・金沢北支部・能登支部 加賀南支部・加賀北支部
福井本部	福井南支部・福井北支部・鯖江支部・武生支部 岐阜本部 岐阜東支部・岐阜西支部・岐阜南支部 岐阜北支部・大野支部・飛騨支部
東海本部	名古屋南支部・名古屋北支部 三河支部・静岡支部
滋賀本部	浅井本部・彦根本部・坂田支部
近畿本部	三重支部・京都南支部・京都北支部・奈良支部 兵庫支部・大阪東支部・大阪西支部・大阪南支部 大阪北支部
中国本部	鳥取支部・広島支部・山口支部・愛媛支部 香川支部・高知支部
九州本部	長崎支部・佐賀支部・福岡支部・宮崎支部 熊本支部・鹿児島支部・沖縄支部
海外本部	サンパウロ東支部・サンパウロ西支部 ハワイ支部・アメリカ支部 韓国支部・台湾支部

\* 教団出版物や様々な断片的資料に基づいて筆者が作成（1996年7月）。